

2026年2月1日 第二礼拝

説教題『赦しつつ、裁く方』使徒17章22~34節

主任牧師 加藤 誠

「それは、先にお選びになった一人の方によって、この世を正しく裁く日をお決めになったからです。神はこの方を死者の中から復活させて、すべての人にそのことの確証をお与えになったのです。」(使徒言行録17章31節)

アテネは文化と芸術の中心であり、パルテノン神殿などの壮麗な建造物が建ち、ギリシャ神話の神々の彫像がたくさん祀られている町でした。使徒パウロはアテネの人々に福音を語りますが、結果的には「死者の復活の教え」を笑われてしまい、福音を受け入れたのは幾人かの人に過ぎませんでした。そのためパウロのアテネ伝道は失敗だったと言われているのですが、しかし私は、たとえ誰一人、耳を傾けてくれる人がいなかつたとしても、パウロがアテネの人たちに何とかしてキリストを伝えたいと祈り、一生懸命に福音を語った事実にこそ意味があるし、パウロの説教は二千年の時を超えて今の私たちに大切なことを伝えてくれていると受け取っています。

説教はそれを聴く人々によって形づくられます。パウロもユダヤ人を前にした時と異邦人を前にした時ではまったく異なるアプローチの説教をしています。ユダヤ人には旧約聖書から説き起こしてイエスこそが救い主であることを力強く論証しましたが、聖書を知らない異邦人には、彼らの関心をとらえてキリストの救いを語りました。アテネに来たパウロは、ギリシャ神話の神々が偶像として祀られている姿に深い怒りを覚えつつも、アテネの人々の心に届くにはどう語り掛けるべきか、工夫しながら説教を始めています。「アテネの皆さん、あらゆる点においてあなたがたが信仰のあつい方であることを、わたしは認めます」(22節)と切り出しながら、「知らざれる神に」と刻まれた祭壇を取り上げて、人々がまだ知らない聖書の神を紹介していました。

この説教でパウロは二つのことを語っています。一つは「すべてを造られた神は、人間が考えるイメージや枠の中に収まる小さな方ではなく、私たちの思いをはるかに超える大きな方だということ。私たちの手の中に神がいるのではなく、神の大きな慈しみの中に私たちは生かされている」ことです。アテーナーという女神の彫像をアテネの人々は誇りましたが、パウロは天地を造られた真の神はそのような偶像に刻まれるような小さな方ではないことを語ると同時に、あらゆる被造物を造られた神は、私たちが探し求めさえすればすぐ近くに見出すことのできる方である(27節)と語ります。AINシュタインはこう言いました。「人生には二通りの生き方しかない。奇跡などないかのように生きるか、それともすべてが奇跡であるかのような生きるかだ」。私たち一人ひとりは神に命と息を吹き入れられ、神の不思議の中に生かされている存在であり、神の恵みの奇跡を感謝して受け取って生きるように招かれているというこ

とでしょう。アテネの人たちは、いろいろな偶像を建てて神々を敬っているようで、実は自分たちの知恵と業を誇っているだけであること。その彼らに何とかして、すべての造り主なる神への畏敬と感謝を知ってほしいと、パウロは語ったのでしょう。

もう一つ、パウロがアテネの人々に語ったことは、神による「正しい裁き」があるということです（31節）。神はすべてを愛して造られた方であると同時に、「与えられた命を、あなたはどう生きるのか？」と私たちを問うておられるということです。この神の「正しい裁き」とはどういうものなのでしょうか。一般に「キリストを救い主として信じる者は救われ、信じない者は滅びる」という時には「私たちの信仰」が裁きの基準になるわけですが、残念ながら「私たちの信仰」自体はとても頼りないものです。例えば、今日「信じる！」と言えても明日はわからない、そういう危うさ、弱さを抱えているからです。どんなに厳しい迫害の中でも「イエスを知らないなどとは言わない！」と言い切れるでしょうか。また「わたしは信じている！」と言いながら、行動において神を悲しませていることは毎日です。例えばクリスチャンと言われる権力者が歴史的にどれだけ神の御心に反する罪を犯してきたか。何百万人もの命を奪う罪を犯しても「わたしは信じています！」と言えば救われるのでしょうか。そのように私たちの側の信仰というものはじつに危うい。パウロが「義人は一人もいない」と言い抜いたゆえんです。「それゆえ私たちの側の信仰は裁きの基準になりえないで、十字架の主の愛と赦しと執り成しによってすべての罪人が、どんな信仰の人も救われる」という理解が語られることがあります。確かに主イエスの十字架はすべての罪を贖う恩寵ですけれども、その一方で主イエスは「幼子のようにならなければ天国に入ることはできない」とはつきり言われています。十字架の主によってすべてが赦されているのですが、天国に入るにあたってはどうしても赦されないこと、神から厳しく問われることがあるのです。例えばルカ18章「徴税人とファリサイ人のたとえ」が示している「罪の自覚」がカギになるのではないでしょうか。つまり、私たちが最後に神の前に立った時に「わたしは罪人に過ぎません。主よ、わたしを憐れんでください」と語れるかどうかが問われるということです。ファリサイ人のように「わたしは神を信じ、これだけのことをしてきた」と自分を誇り、他者を見さげ、自分の罪を認めないなら、残念ながら天国の扉はあかない。「友よ、わたしはあなたを知らない」と主イエスから言われてしまうということです。その意味で、私たちが日々聖書を開くのは、「十字架の主の赦しによってのみ自分は生かされている。神の前に毎日罪を重ねている者が、神の恩寵と恵みによって生かされていることを感謝します！」という信仰を学ぶためです。自らの信仰の弱さを自覚しつつも「だから何をしてもよいのだ」に流されることなく、私たちを赦しつつ、裁く方の前に、正しく立つ信仰を日々聖書から学び、主イエスと共に歩ませてくださいという祈りの中に歩んでいきたいのです。